慎重かつ穏当なものであり、刊刻の美しさともあわせて、テキストとしてはむしろ『元曲選』にまさるといっても過言ではない。また資料としても、『元曲選』以前の古形を多くとどめ、特に「老生児」「張生煮海」「李逵負荊」などにおいては、今では失われてしまった古いテキストの姿を伝えるものとして、高い価値を持つ。不幸にして『元曲選』ほど広く流布しえなかったために軽視されてきたこのテキストは、今一度再評価される必要があろう。

筆者はこれまで元刊本・趙琦美鈔本・『元曲選』について考察を行ってきた。残る問題は、古名家本以下の諸本の性格の解明である。元雑劇テキストの全容を明らかにするための最後のステップともいうべきこの点については、稿を改めて論じることとしたい。(13)

（注）

(1) ここでいう「元雑劇」とは、厳密に元代のもののみをさすのではなく、明初のもの（仮に周憲王以前の作とする）までを含む。

(2) 顧曲斎本にも玉陽仙史の序があり、その末尾に「王氏伯良」つまり王驥徳の印が彫られている。つまり玉陽仙史は王驥徳である可能性が高いものと思われる。詳しくは、「明刊本考」（『中国古典演劇研究』〔汲古書院より刊行の予定〕所収）を参照。

(3) 「孟浩然踏雪尋梅」は馬致遠作と題するが、実は周憲王の作なので除外した。

(4) 『古本戯曲叢刊』四集に影印されている範囲では継志斎の名はどこにも見えないが、袁世碩主編『元曲百科事典』（山東教育出版社一九八九）の「元明雑劇」の項によれば、「薦福碑」の原本には封面があり、そこに「継志斎原板」と記されているという。

(5) 『元曲百科事典』及び『北京図書館古籍善本書目』。

(6) この区別は孟称舜自身のものに従う。即ち、賈仲名ら本論で「元雑劇」の範囲に含めている明初の作家は、明に含まれる。

(7) 唯一の例外としては、楔子における浄のセリフ「充後宮」（顧曲斎本・『元曲選』）が、古名家本と孟本では共通して「克後宮」となっている事実が指摘されるが、この「克」は明らかに字形の類似から来た誤字であり、入念な校訂を経ている孟本が先行テキストのこうした誤りを無批判に受け継ぐとは考えがたい。単なる偶然の一致であろう。

(8) 『彙刻書目』による。

(9) 詳しくは拙論「『元曲選』成立考」（『東方学』百一）参照。

(10) 孫楷第氏は、前掲書一一八頁で、息機子本の出版時期と趙琦美の校訂時期が近いことから、趙琦美は全本を所有しており、後に銭曾の手に渡るに当たって失われたものと推定しておられるが、もとより確実なことではない。

(11) 詳細については拙論「『脈望館鈔古今雑劇』考」（『日本中国学会報』五十一〔二〇〇〇年十月〕）参照。

(12) 一般に嘉靖四十五年春山序刊本（『四部叢刊続編』所収）が知られており、同年の刊本とする記述が多いが、嘉靖十年王言序刊本がそれに先行して存在する。嘉靖四十五年は編者郭勛の失脚後であり、この年に最初に刊行されたとは考えられない。事実春山（宦官であろう）序は一切郭勛にふれていない。両書は版式が同一で、ともに内府の刊本と考えられる（王重民『中国善本書提要』参照）。

(13) (2)所引の論文で論じている。

（二〇〇〇年八月二十四日受理）

（こまつ　けん　文学部助教授）

かであろう。つまり孟本と『雍熙楽府』の一致は、『元曲選』を経由してもたらされたものではないことになる。この範囲における『雍熙楽府』との異同は二カ所、第四句の「柳花」は第二句との重複を避けたもの、第六句の「兀剌剌」はＡＢＢ型形容詞を各句の頭に冠するという原則からこの句だけが逸脱しているためであり、つまりはいずれも孟称舜個人の判断によってなされうる改変である。『元曲選』も、前者は第二・四・六句をすべて「落花」で結ぶという形で、後者は「虚飄飄」と改めるという形でそれぞれ手を加えているほか、「剌剌」の重複を嫌って第三句をも改めているが、改変のパターンから考えて、『元曲選』も『雍熙楽府』、もしくはそれとほぼ同一の本文を参照していることは明らかであろう。つまりここで、『元曲選』と孟本はともに『雍熙楽府』を校訂に使用していることになる。そして続く【寄生草】は、『元曲選』にもない以上、『雍熙楽府』もしくはそれと同内容のテキストに依拠しているとしか考えられない。

これは「『元曲選』成立考」でも論じたことであるが、『雍熙楽府』に代表される一連の曲選、具体的には『盛世新声』『詞林摘艶』『詞謔』、更には実例を伴う曲譜『太和正音譜』は、その成立時期から考えて、明刊本校訂にあたって無視できない存在である。『雍熙楽府』は前述の通り嘉靖十年、『盛世新声』は正徳十二年（一五一七）、『詞林摘艶』は嘉靖五年（一五二六）の序をそれぞれ伴う。なお後二者は類縁関係にあるため内容的に重複する部分が多い。『詞謔』は李開先による曲話だが、套数単位で多くの作例を引用している。成立年代は不明だが、嘉靖年間の可能性が高い。『太和正音譜』は、いうまでもなく寧献王朱権の手になる最古の曲譜。当然多くの作例を引いている。洪武三十一年（一三九八）の序を伴う。つまりこれらは、いずれも一連の明刊本が刊行される以前に成立したものであり、より古い形態をとどめている可能性があるということになる。曲文のみしか録されていないとはいえ、その存在を軽視するわけにはいかない。しかも『詞謔』以外は刊本として存在した以上、明刊本の校訂者たちはこれら諸本を参照している可能性がある。明刊本の成立について考えるにあたり、この点を考慮せずにすますことはできないであろう。

さて、孟称舜が「金銭記」校訂にあたって使用したのは『雍熙楽府』だけではない。第二折に入ると、今度は二つの【倘秀才】と【煞尾】で『詞林摘艶』と一致を示すのである。無論、これら散曲集ではなく、今は失われた別のテキストに基づいている可能性も否定はできないが、特に『雍熙楽府』との関係の密接さから考えて、少なくとも同書は参照していると見るべきであろう。

六

以上見てきたように、孟本は顧曲斎本・『元曲選』を主たる底本に、顧曲斎本の場合には『元曲選』で手を加え、一部『雍熙楽府』をも参照したテキストと思われる。また底本として継志斎本、校訂用に『詞林摘艶』も使用された可能性がある。

つまり、従来『元曲選』の亜流として軽視されてきた『古今名劇合選』は、実は独自の価値を持つテキストであったことになる。孟称舜の校勘態度は、『元曲選』における臧晋叔のそれに比して、はるかに

い。すると、継志斎本に依拠する可能性が最も高いということになろう。継志斎本は、残存する四種のうち三種までが孟本と一致する。そのうち「薦福碑」は、後述するように古名家本と『元曲選』に依拠しているが、「揚州夢」においては古名家本より、更に「梧桐雨」においては古名家本のみならず顧曲斎本よりも孟本に接近する内容を持っており、あるいは顧曲斎本・『元曲選』とならんで、孟本の主たる来源となったのかもしれない。もとより、『改訂元賢伝奇』（「揚州夢」「梧桐雨」をともに含んでいた）をはじめ、全く現存しない別系統の版本が存在した可能性も否定はできない。

五

以上見てきたように孟本は、顧曲斎本を中心とする明刊本をもとに、『元曲選』により改変を加えた部分を持つ（一部『元曲選』をそのまま使用したものもあるが）テキストと思われる。ところが、これには顕著な例外が存在する。「金銭記」である。

「金銭記」には『酹江集』のほか、古名家本・顧曲斎本・『元曲選』と主要テキストがそろっている。単純に考えれば『酹江集』本は、孟本の常として顧曲斎本と『元曲選』の中間に位置する内容であろうと予想される。ところが実態は全く異なるのである。孟本の第一折には、古名家本・顧曲斎本にない【那吒令】【鵲踏枝】が存在する。この二つの曲牌は『元曲選』には存在するが、孟本とはかなり異同があり、臧晋叔が附加したものを孟本がそのまま使用したとは考えられない。更に、古名家本・顧曲斎本・『元曲選』ではその後に【寄生草】【金盞児】と続くが、孟本のみ【寄生草】【幺篇】【金盞児】となっている。両者を比較すると、孟本以外の【寄生草】は、孟本の【幺篇】に該当することが分かる。つまり、孟本の【寄生草】は、他のテキストには存在しないことになる。しかし、先述したように孟称舜の校訂態度は臧晋叔とは異なり、自作の曲を挿入するようなことは決して行わない。この【寄生草】はどこから来たのであろうか。

実は、これとほぼ一致する曲文を持つテキストが、雑劇集以外のところに存在するのである。『雍熙楽府』である。『雍熙楽府』は、嘉靖帝の寵臣であり、『英烈伝』の作者に擬され、『水滸伝』の刊行者として知られる郭勛により編纂された曲選である。刊行時期は、序文の日付に従えば嘉靖十年（一五三一）、[12] 内府の刊と思われる。同書は雑劇を套数単位で分解し、曲文のみを散曲と同様の扱いで収録しており、その巻四に「金銭記」第一折の曲文が収められている。そしてそこには【那吒令】【鵲踏枝】【寄生草】【幺篇】のすべてが記されているのである。しかも前二者の曲文は『元曲選』よりはるかに孟本に近い。【那吒令】の前半を比較してみよう。

（雍）　香車載楚娃。乞刺刺彫輪碾落花。王孫乗駿馬。疎刺刺金鞭払落花。遊人指酒家。　兀那青旗挿杏花。

（元）　俺則見香車載楚娃。各刺刺彫輪碾落花。王孫乗駿馬。撲騰騰金鞭曇落花。遊人指酒家。虚飄飄青旗颺落花。

（孟）　香車載楚娃。乞刺刺彫輪碾落花。王孫乗駿馬。疎刺刺金鞭払柳花。遊人指酒家。兀刺刺青旗挿杏花。

一見して『元曲選』より孟本の方が『雍熙楽府』に近いことは明ら

及した「張生煮海」がどのようなテキストに基づいているかは不明である。

四

ではなぜこのように同一の雑劇集について、依拠もしくは参照しているものとそうでないものが存在するのであろうか。その原因は雑劇集というものの出版形態に求められよう。『元曲選』が二度に分けて刊行され、孟本もその可能性があることはさきにもふれたが、その他の雑劇集にも、何度かに分けて刊行されたものがあったようである。顧曲斎本は、巻頭にすべてを含む目次を掲げているところから考えて、おそらく一度に刊行されたものと思われるが、他は必ずしもそうではなかった。特に古名家本は、孫楷第氏の復原によれば、元雑劇十二集と、元来六人の作者の別集形態で個別に刊行された明雑劇五集からなっていたという。前述の通り、それぞれ万暦十五年と十六年の二つの刊記が確認されることから、これら一連の雑劇集は、さみだれ式に刊行されたものと思われる。当然すべてを一括して入手することは必ずしも容易ではなかったであろう。つまり孟称舜が入手できたのは古名家雑劇の一部だったのではないか。

そして事実、古名家本に含まれるにもかかわらず孟称舜が明らかに参照していない「漢宮秋」「麗春堂」「王粲登楼」は、孫氏の復原ではおそらく一集にまとめられていたのではないかとされている。また、やはり明らかに参照されていない「鉄拐李」と、参照した可能性が少ない「青衫涙」は、やはり顧曲斎本を有する「玉鏡臺」とあわせて一集だったとされる。他方、古名家本以外に参照すべきテキストがなかったであろう「墻頭馬上」は「紅梨花」「対玉梳」、同じく「竇娥冤」は「倩女離魂」「城南柳」と同一の集に収められていた。「紅梨花」「対玉梳」「倩女離魂」「城南柳」の四種は、いずれも古名家本と顧曲斎本をともに残し、なおかつ双方の本文はほとんど同じである。つまり孟称舜は、「漢宮秋」「麗春堂」「王粲登楼」「鉄拐李」を含む集は見ておらず、他方「墻頭馬上」と「竇娥冤」を含む集は参照していたのではないかと思われるのである。

息機子本についても同様のことがいえる。「度柳翠」「范張鶏黍」「東堂老」は息機子本に基づいている可能性が高いものと思われるのに対し、「王粲登楼」「誶范叔」には息機子本との関係が全く見出されないのは、孟称舜が息機子本の一部しか所有していなかったことに由来するものであろう。息機子本の出版形態がどのようなものであったかは不明だが、趙琦美の所蔵本にも全三十種中十五種しか含まれていないことは、この仮説の傍証となるであろう。[10]

「張生煮海」「老生児」「李逵負荊」はどのようなテキストに依拠したのであろうか。その候補として考えられるのは、現在では失われてしまったテキスト、具体的には息機子本・『陽春奏』・継志斎本の現存しない部分であろう。今は失われたテキストのうち、息機子本の四種と、『陽春奏』の三十三種（うち二十種が元雑劇、四種が内府の慶寿用雑劇）[11]の内容は、それぞれ『彙刻書目』『続彙刻書目』から知ることができる。それによれば、右の三種の中、「老生児」についてはかつて息機子本が存在したことが知られるが、他の二種の名は見えな

王粲登楼　古名家本・『元曲選』
竇娥冤　古名家本・『元曲選』
鉄拐李　『元曲選』
李逵負荊　『元曲選』
誶范叔　息機子本・『元曲選』
東堂老　息機子本・『元曲選』
趙氏孤児　『元曲選』
麗春堂　古名家本・『元曲選』
燕青博魚　内府本・『元曲選』
老生児　『元曲選』
魔合羅　古名家本・『元曲選』
隔江鬪智　『元曲選』

顧曲斎本との重複が著しく減少するのは、一つには顧曲斎本に収められているものが繊麗な作を主としており、『柳枝集』にこそふさわしくとも、豪放な作を集めたという『酹江集』には不適であったことに由来するものかもしれない。事実、『酹江集』と顧曲斎本とに重複するわずか三種のうち、「漢宮秋」と「梧桐雨」は必ずしも豪放とはいいがたい作風である。しかし他方、この両集が同時に刊行されたとは限らない点からすれば、まず前半の『柳枝集』を刊行した段階で顧曲斎本をほぼ使い尽くしてしまったので、後半は異なった来源を求めざるをえなかったという考え方も可能であろう。別稿で述べたように、『元曲選』が資金の都合から半分ずつ二度に分けて刊行されている事例から見ても、大部であり、明らかな二部構成を取っている孟本においても同様の事情があった可能性は高いものと思われる。そして『元曲選』との関係も、この仮説を補強する傾向にある。

右に列挙した十五種のうち、眉批に「原本」に関する言及がなく、本文も『元曲選』とほとんど同一である事例は過半数の八種に及ぶ。これは『柳枝集』には一例もなかったケースである。しかも、他に『元曲選』以外のテキストが伝存していない「趙氏孤児」「隔江鬪智」がそうであることはいわば当然であろうが、息機子本を残す「王粲登楼」「誶范叔」、古名家本を残す「麗春堂」「魔合羅」、内府本を残す「燕青博魚」、かつて古名家本が存在したという「鉄拐李」[8]においても同様の現象が認められるのである。このことから、別稿で述べた臧晋叔の場合とは異なり、孟称舜は内府のテキストを目にする機会をおそらく持たなかったであろうこと、『柳枝集』には息機子本や古名家本との関係を思わせる事例もあったが、少なくともそのすべてを目にしたわけではないであろうことが分かる。このように『元曲選』のみに依拠した雑劇が急増しているという事実は、素材が不足をきたしたという先の推定を裏付けているのではなかろうか。

他方、現在は『元曲選』以外のテキストが残されていない「李逵負荊」「老生児」には「原本」への論及があり、本文も『元曲選』と同一ではない。また『元曲選』以外には鈔本一種のみを残す「任風子」についても同様のことがいえ、しかも孟本の本文は鈔本とも一致しない。[9]上記の事実は、これらの雑劇に今は失われた刊本が存在したことを示唆するものである。三種のうち「任風子」のみはかつて古名家本が存在したことを確認しうるが、残り二種と、『柳枝集』の項で論

するのに対し、古名家本と『元曲選』は「青衫泪」と、異体字を用いているのである。そして本文にもこの系統分けに合致する箇所が存在する。開巻劈頭、白楽天のセリフである。

（古）這教坊司有箇裴媽媽家有一女、小字興奴

（顧）這教坊司有箇裴興奴

（元）這教坊司有個裴媽媽家有一個女児、小字興奴

（孟）這教坊司有箇裴興奴

古名家本と『元曲選』、顧曲斎本と孟本がそれぞれ密接な関係にあることは一目瞭然であろう。

以上二つの事例は、孟本が依拠したテキストが顧曲斎本であることを示しているように思われる。そして、現存する顧曲斎本二十種の中十六種までが孟本に含まれていることは、両者の関係の密接さを示すかの如くである。ただし、十六種すべてについて孟本と顧曲斎本の一致が認められるわけではない。「儞梅香」は明らかに顧曲斎本より息機子本に近く、「金銭記」「瀟湘雨」においては一部孟本独自の本文が認められる。従って、顧曲斎本に含まれているものでも多少の例外は存在するということは、注意しておく必要があろう。

三

では孟本に収められた元雑劇のうち、十六種以外のものについてはどのようなことがいえるであろうか。『柳枝集』に収める元雑劇は十九種、うち十三種は顧曲斎本と重複する。顧曲斎本にない六種における版本の伝存状況は次の通りである（煩を避けるため、以下の議論から元刊本は除く）。

揚州夢　古名家本・継志斎本・『元曲選』・（『改訂元賢伝奇』）

墻頭馬上　古名家本・『元曲選』

張生煮海　『元曲選』

度柳翠　息機子本・『元曲選』

悞入桃源　古名家本・息機子本・『元曲選』・（『改訂元賢伝奇』）

城南柳　古名家本・息機子本・『元曲選』

これらのうち「揚州夢」については、孟本は継志斎本と一致しながら古名家本とは異なる点をはっきり持っている。また「城南柳」においても、孟本は古名家本より息機子本に近い。こういうと古名家本は無関係のようだが、『元曲選』以外には古名家本のみしか伝わらない「墻頭馬上」においても、孟本の内容は『元曲選』と古名家本の中間にある。これは古名家本もしくは現存しないテキストに依拠したことに由来するものであろう。また「張生煮海」は、現在孟本以外には『元曲選』のみしか伝存しないが、孟本の眉批には「原本」への論及があり、事実その本文は『元曲選』と異なる部分を持つ。

『酹江集』においては事情が大幅に異なる。同集所収の元雑劇十八種の中、顧曲斎本と重複するのは「漢宮秋」「梧桐雨」「風雲会」の三種のみ（ちなみに「風雲会」は唯一『元曲選』と重複しない元雑劇である）、残り十五種の版本の伝存状況は次の通りである。

任風子　脈望館鈔本（内本と世本の混合）・『元曲選』

薦福碑　古名家本・継志斎本・『元曲選』

范張鶏黍　息機子本・『元曲選』

のが馬致遠の二つの雑劇「漢宮秋」と「青衫涙」である。

「漢宮秋」には古名家本・顧曲斎本・『元曲選』・孟本が現存する。筆者は別稿で第三折【落梅風】をあげて、『元曲選』が依拠しているのが古名家本で、顧曲斎本とは無関係であることを示した。今ここで孟本をも加えてもう一度同じ箇所を示してみることにしよう（俗字・当て字も原文のままにあげる。傍線部は最初の事例と異なる部分。以下同じ）。

（古）可憐俺別離重。你好是回去的忙。寡人心先到他李陵臺上。為頭児却才魂夢里想。便休題貴人多忘。

（顧）早是俺別離重。只恁般帰去忙。一片心先到李陵臺上。為頭児恰纔心内想。便休題貴人多忘。

（元）可憐俺別離重。你好是帰去的忙。寡人心先到他李陵臺上。回頭児却纔魂夢裏想。便休題貴人多忘。

（孟）早是俺別離重。只恁般帰去忙。一片心先到李陵臺上。回頭児恰纔心内想。便休題貴人多忘。

孟本第四句初めの「回頭児」が『元曲選』に一致するのを除けば、孟本はすべて顧曲斎本、『元曲選』は古名家本と一致している。つまりこの曲牌に関する限り、孟本の本文は、顧曲斎本に基づき、『元曲選』をも参照して作られているように思われる。次に、続く【殿前歓】を同じようにして検討してみよう。

（古）則甚麼舞衣裳。　怕西風吹散旧時香。我委実怕宮車再過青苔巷。

（顧）則甚麼舞衣裳。　我則怕春風吹動旧時光。　怕宮車再過青苔巷。

（元）則甚麼留下舞衣裳。　被西風吹散旧時香。我委実怕宮車再過青苔巷。

（孟）説甚麼留下舞衣裳。我則怕被春風吹散旧時香。　宮車再過青苔巷。

この事例からは、孟称舜の本文作成態度をより明確に見て取ることができる。第二句の「我則怕」「春風」、第三句の「我委実」に見られるように、孟本の本文は顧曲斎本と『元曲選』の中間にある。第三句の襯字を孟本のみ欠くのは、「怕」の重複を避けたためであろう。『元曲選』でも同様に重複が避けられているが、顧曲斎本と『元曲選』を見比べると、あまりにも改変の度合いが大きすぎるように思われたのであろう。このことは、孟称舜が古名家本を目にしていないことを示唆していよう。事実、孟本が古名家本と一致する箇所は、いずれも『元曲選』とも一致していることは注目されてよい。(7)

以上の傾向は「漢宮秋」全体に共通する。つまり、「漢宮秋」のみについていえば、孟称舜は古名家本は目にしておらず、顧曲斎本に依拠し、『元曲選』を参照しながら、自分の考えも加えて本文を作成したものと思われる。では他の雑劇についても同じことがいえるであろうか。次に「青衫涙」を検討してみたい。

「青衫涙」にも、「漢宮秋」同様の四種の刊本がそろっている（他に『改訂元賢伝奇』もあるらしい）が、テキスト間の差異は「漢宮秋」に比べればはるかに小さい。とはいえ違いがないわけではない。四種の相違はまず題名に現れている。即ち顧曲斎本と孟本が「青衫涙」と

い。もとよりこの注記は完全なものではなく、黙って『元曲選』の文言を用いている例もかなり認められるが、何の断りもなく改竄を加える臧晋叔と比較すれば、格段に良心的な編集態度といってよいであろう。

他方、「倩女離魂」に「余為に八九を訂す」といいながら、孟称舜自身の考えで手を加えた例は比較的少なく、改変の程度も甚だしくはない。つまり孟本は、実質的には『元曲選』と他のテキストとの折衷といってよいのである。これは孟称舜が校訂にあたって怠惰であったためではなく、彼の雑劇校訂に対する意識に由来するものであろう。それを示しているのが、「漢宮秋」第三折【梅花酒】に付された眉批である。「呉興本改数語、亦頗有次第。而原本固自佳、不若仍之存餼羊之旧。吾意古本非甚訛謬、不宜軽改。改本有勝前者、始不妨稍従之耳（呉興本は数語を改めており、それもなかなか悪くない。だが原本が元来すぐれているのだから、原形を残しておくにこしたことはあるまい。私の考えでは、古いテキストは、ひどく間違っているのでない限り、軽々しく改変すべきではない。改変本に前のテキストよりすぐれたものがあってはじめて、少しぐらいなら従ってもよいということになる程度のことなのである）」。つまり孟称舜は、必ずしも原形保存にはこだわらず、よりすぐれた表現になるのであれば改変することも決して否定はしないが、恣意的にして過度な改変は否定するのである。この意見が臧晋叔に対する批判の意を言外に含んでいることはいうまでもない。

以上見てきたように、孟称舜の編集態度は、臧晋叔のそれに比して穏当なものである。さて、では彼が依拠した「原本」（一部では元本・古本という語も使用。元本というのは、おそらく元代のテキストという意味ではなく、原本と同義であろう）とは何なのか。自序には「呉興本より外、見る所百餘十種」とある。この「百餘十種」とは、具体的には何だったのであろうか。

まず、宮廷演劇の上演用台本、即ち内府の鈔本であった可能性は低いであろう。宮廷系のテキストを使用しているなら、それは絶好の宣伝文句であり、別稿で述べた『元曲選』の事例のように特筆大書する可能性が高いものと思われるからである。また、李開先以外の人間が目にしていた可能性が低い元刊本も検討対象から除外してよいであろう。事実、後に述べる特殊なケースを除けば、他の明本が元刊本と異なった字句を用いている箇所について、孟本だけが元刊本と一致する例はない。先行する刊本に依拠しているとすれば、現存の五種のいずれかを使用しているか、もしくは今では失われたテキストに基づくかのいずれかになる。無論、『元曲選』の場合と違って孟称舜が具体的な書名をあげないのは、複数のテキストに依拠しているためである可能性も排除できない。

この問題について考える場合、一番の障害となるのは、『元曲選』・孟本以外の明刊本相互の間における異同が非常に少ないことである。しかし、かなり大きな違いを見せる事例もないわけではない。そこで、孟本・『元曲選』と、字句に異同を含む複数の明刊本があわせ残されているテキストを校勘すれば、孟本が主たる原拠としたテキストが何であるかをつきとめることができるであろう。その条件にあてはまる

たのであろう。つまりは、息機子本・『陽春奏』・継志斎本など書坊の名のみを伝える版本と性格的には大差ないということになる。

それに対し、臧孟両氏の態度は根本的に異なる。彼らは、何らかのテキストに基づきつつ、他のテキストもしくは自身の判断に基づいて、校訂もしくは改変を加えているのである。臧晋叔の手法については、別稿で述べたとおりである。では孟称舜はどのテキストに基づき、どのように改変を加えたのであろうか。

孟称舜（一六〇〇？～一六八六？）は会稽の人。科挙に合格することができず、清朝に入って貢生となったが、松陽県学訓導に終わった。社会的栄達はならなかったが、演劇界にあっては名声が高く、祁彪佳・張岱ら、演劇愛好家として知られる同郷の名士と交流し、『嬌紅記』を始めとする南曲五種（三種が現存）と雑劇六種（五種が現存）を著している。特に南曲三種に刊本が存在することは、劇作家としての名声の証左であるとともに、彼が出版関係者と相当密接な関わりを持っていたことをも示唆するものであろう。

『古今名劇合選』に付されている崇禎六年の自序にはこうある。「元曲自呉興本外、所見百餘十種、共選得十之七。明曲数百種、共選得十之三（元曲は、呉興本以外に目にしたもの百十種、全体からその七割を選んだ。明曲は数百種、全体から三割を選んだ）」。実際には、収録されているのは元の作三十四種、明の作二十二種[6]であり、ここでいう数値は甚だしい誇張ということになるが、それはともかく、元の作品については「呉興本」即ち『元曲選』（呉興は臧晋叔の出身地湖州の古名）と、その他のテキスト「百餘十種」とをあわせ見たことが明記されているわけである。

このことは、収録作の内容からも確認できる。例えば、『柳枝集』の最初に収められている「倩女離魂」の冒頭には次のような眉批が付されている。「此劇余所喜、雑本相沿訛謬甚衆。余為訂其八九。呉興本多所改擅、有意旨勝原本者、間亦従之（この劇は私が好きな作品なのだが、雑本がこれまで伝えてきた誤りは非常に多い。その八、九割は私が訂正した。呉興本には改竄が多いが、原本に勝る境地にあるものについては、従った箇所もいくつかある）」。つまり、いくつかのテキストを総合し、自らの考えをも加えて本文を作成したということになる。そして『元曲選』は最も主要なテキストとして重視されてはいるものの、孟称舜は同書に「改竄が多い」ということを明確に認識し、非常に批判的な態度で、明らかにすぐれると思われる場合のみその本文を採用したということになる。

孟称舜のこうした態度は、その後の本文の中にも明確に示されている。例えば第一折の【混江龍】に付された眉批にはいう。「呉興本于此枝刪去将半、殊覚寂寂矣（呉興本ではこの曲牌の半分近くをカットしてしまっているので、なんとも寂しく感じられる）」。その他の雑劇においても、至る所に『元曲選』への言及が認められる。例えば「青衫淚」第四折【紅綉鞋】の眉批。「緑珠二句依呉興改本。餘曲中字句亦間有従之者、不及標出（『緑珠』以下の二句は呉興改変本に基づいた。そのほかの曲牌の字句にも呉興本に従うものがあるが、特記はしない）」。このように、『元曲選』のみが他のテキストと大幅に異なる場合、従うにせよ従わぬにせよ、何らかの形で注記を加えることが多

⑤継志斎元明雑劇　継志斎刊。[4] 継志斎は南京の書坊。経営者は陳邦泰（字は大来）。『古本戯曲叢刊』四集には四種を収めるが、他に「金銭記」と明の王九思の「沽酒遊春」が北京図書館に所蔵されているという。[5]

⑥元曲選　臧懋循（字は晋叔）雕虫館刊。臧氏による万暦四十三・四十四年（一六一五・六）の二つの序を伴う。入念な校訂が施されている。百種。

⑦古今名劇合選　孟称舜編刊。崇禎六年（一六三三）孟氏の序を伴い、巻頭に『録鬼簿』を付す。『柳枝集』『酹江集』の二部各三十種からなり、前者は恋愛ものを中心にいわゆる婉約の作を、後者は神仙・公案・任侠など豪放な作を中心にすると称する。元雑劇は四十種。

以上、①③⑤は刊行した書坊の名が明記され、⑥は臧晋叔の自刻と思われるが、②④⑦の刊行事情については、詳細は不明である。

これらの版本における主たる問題は何であろうか。まず第一に考察すべきは、『元曲選』の方向付けであろう。はたして『元曲選』はどのようなテキストを底本とし、どのような方法で、いかなる改変を加えたものなのか。他のテキストと異なる部分は、すべて臧晋叔が独断で改変を加えたものなのか、それとも別に基づくところがあるのか。同様のことは、孟称舜の『古今名劇合選』（以下孟本と略称）についても問われねばなるまい。次には、上記二テキスト以外の諸本の性格が問題となる。これらの諸本は、基本的に同一内容を持つとされてきたが、本当にそうなのか。また、これら諸本と脈望館鈔本との関係はどのようなものなのか。そして、これら二つの問題全体と関わって、最古のテキストである元刊本、そしてすべての版本に先行する時期に刊行された一連の曲選、『雍熙楽府』『詞林摘艶』『盛世新声』『詞謔』と諸刊本との関係を解明する必要がある。

『元曲選』については、すでに別稿「『元曲選』成立考」で詳しく論じたように、古名家本と明朝宮廷演劇のテキスト（いわゆる内府本）を主たる底本にして、『雍熙楽府』により校訂を加え、更に臧晋叔独自の判断で改作を施したものと思われる。では孟本はどのようにして成立したのであろうか。孟本は『元曲選』より遅れて成立し、しかも流布の範囲が限定されていたために従来軽視されてきた。孟本は本当に『元曲選』の亜流に過ぎないのであろうか。

二

一連の明刊本の中にあって、『元曲選』と孟本は、他の諸テキストとは大きく異なる性格を持つ。それは、それぞれ臧晋叔と孟称舜という、自身劇作家として名の通った一流の知識人により、批判的な校訂が施されているという点である。もとより陳与郊・王驥徳も高名な劇作家ではあるが、そもそも先にふれたように、彼らが実際にこの出版に関与していたと確認することは困難であり、仮に関わっていたとしても、後述するように古名家本や顧曲斎本は他のテキストと内容的に大差なく、特に手を加えた形跡は認められないのである。ということは、陳与郊や王驥徳の関与の有無に関わらず、これら二つの版本は、おそらく書坊が手元にあったテキストをほぼそのまま刊刻したものだっ

『古今名劇合選』考

小松　謙

今日残されている元雑劇[1]のテキストは、不完全な元刊本がわずかに三十種のみ残されているのを例外として、他はすべて明代後期に刊行・抄写されたものである。従来はこれらのテキストを、さしたる疑問も抱かず元雑劇の実態を伝えるものとして使用してきた。しかし、元刊本と明代諸本の間の距離の大きさから考えて、明代の諸本が元代の形態をそのまま伝えているとは考えがたい。ここに明代諸本の性格解明が、元雑劇研究を進めるにあたって欠くべからざる手続きとして要請されることになる。

この認識に立って、筆者はかつて「内府本系諸本考」（『田中謙二博士頌寿記念中国古典戯曲論集』（汲古書院一九九一））を発表したが、不十分な点も多く、更に詳細な研究の必要を感じて「元雑劇における祭祀的演目について」（『中国文学報』五十八）において元刊本、「脈望館鈔古今雑劇考」（『日本中国学会報』五十二）においては趙琦美鈔本、「『元曲選』成立考」（『東方学』百一）においては『元曲選』について論じてきた。本論文では、一連の明刊本の中では最後に成立した孟称舜編の『古今名劇合選』について、『元曲選』との関係を踏まえながら論じてみたい。

一

明代に刊行された元雑劇のテキストの中、現在存在を確認できるものは以下の通りである。なお、①～⑤については別に専論を発表する予定なので、ここでは簡単にふれるにとどめることにする。

①古名家雑劇　新安（徽州歙県）徐氏刊。一部に万暦十六・十七年（一五八八・八九）の刊記あり。玉陽仙史の編。玉陽仙史は陳与郊の号とされるが、王驥徳と見る説もある。[2]現存する元雑劇は四十七種。

②息機子古今雑劇選　万暦二十六年（一五九八）息機子の序を伴う。現存する元雑劇は二十五種。[3]

③陽春奏　黄正位尊生舘刊。万暦三十七年（一六〇九）于若瀛（一五五二～一六一〇）の序を伴う。現存する元雑劇は三種。

④顧曲斎古雑劇　万暦年間顧曲斎刊。玉陽仙史の序を冠する。玉陽仙史の正体については、王驥徳・陳与郊の両説あることは①に述べた通り。現存する元雑劇は二十種。